

自分は大衆の心を表現しているのだ

古賀 政男



国民栄誉賞が始まったのは昭和五十二年（一九七七年）で、第一号が王貞治、そして第二号が古賀政男であります。「昭和の歌謡界を通して、大衆に日本の心を語り続けた」というのが授賞の讃辞さんじでした。

レコードの売上げが示す古賀メロディの戦前のベスト五是①誰か故郷を思わざる、②酒は涙か溜息ためいきか、③影を慕したいて、④人生劇場、⑤ああそれなのに。戦後のベスト三は①柔やわら、②悲しい酒、③湯の町エレジーとのことで、これらの題名を見ただけで、思わず口ずさまれる方も多いことでしょう。

「人生劇場」は尾崎士郎の小説が映画化されたときの主題歌で、佐藤惣之助の作

詞です。古賀は自伝で「私が作曲の醍醐味だいごみ（本当のすばらしさ）を知ったのは、やはり惣之助さんと出会ってからだと思う」と述べています。

古賀は明治三十七年福岡県大川に生まれました。生家跡せいかに並んで古賀政男記念館があります。五歳のとき父を亡くし、母と朝鮮の仁川インチヨンに渡り、苦しく貧しい少年期を送りました。

大倉喜八郎の創立した京城けいじょう善隣商業学校を経て帰国、大阪で金物屋に奉公。のちに上京して明治大学で学び、明大マンドリン倶楽部くらぶを創設、昭和六年にコロンビアに入社して、当初、作曲に自信がありませんでしたが、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）在籍時の藤山一郎と出会ったことが古賀政男の人生を大きく変えることになりました。藤山一郎の歌唱表現が古賀政男の才能を開花させたのです。それからの活躍は、周知しゅうちの通りであります。

東京オリピックの開催は昭和三十九年で、古賀の作曲による「東京五輪音頭おん」が人びとに愛唱されました。その年の暮、古賀の還暦祝いが開かれ「功成りこうな

名^なとげて、これ以上何に挑戦しますかね」と聞かれた古賀は、きまじめな顔で「恋があるじゃないか、青春は永遠だよ」と答えました。

古賀は、作曲活動の傍^{かたわ}らで昭和三十四年に日本作曲家協会を創設。初代会長となりました。晩年の昭和四十九年には「広島平和音楽祭」を開催しました。

古賀メロディは、今もなお人々の心に勇気や希望を与え続けてくれています。

※古賀 政男（こが まさお・昭和五十三年へ一九七八年）没・七十三歳）

◎ 古賀メロディは昔（一九六〇年代）の日本を感じて、大好きな私です。

◎ 国民栄誉賞に相応^{ふさわ}しい、国民に元氣を与える名曲の数々に「ありがとう」

と申し上げます。

（M生）